



馬耳東風

去年は自宅に籠もった一年だった。最初の緊急事態宣言の発出以降、全国的な社会・経済活動の停滞があらゆる場面でみられ、多くの人々の生活基盤に大きな影響を与えている。明けて、2度目の緊急事態宣言が発出された直後の首都圏での人の往来は余り減少していないと報じられている。外出禁止という強制措置を執ればウイルスの伝播はかなり防御できるであろうが、個人の良識に委ねる規制では、期待されるほど感染拡散抑止効果は出ないのではなかろうかと考えている。今の事態は当分の間続きそうで、出口の見えない自粛生活で心身ともに疲れてきた。毎日1時間のウォーキング以外の外出を控え、自宅に籠もって、改めて精神的な拘束が心身の健康に与える影響の大きさを認識した。毎日が日曜日と揶揄される高齢者の一人として、通院と食糧調達以外の外出は不要不急の行動と言えなくもないであろうが、事はそんなに単純でもない。高齢者にとっては心身の健康を維持し、生き甲斐を持って周囲に迷惑を掛けないように生活することが在るべき姿と考え、それを目標に生きているが、不要不急の活動の中にこそ、それを成就するために必要な「生き甲斐」を生む場があり、これを除外すれば毎日が感動も無いマンネリ生活しか残らないように思われる。

そんなことを考えながら、巣籠もり中、空いた時間があれば毎日のように絵筆を持ち、世間の雑音に惑わされる事もなく、絵を描いて過ごした。それまで温めてきた画題を画面に定着させる作業は至福の時間であった。しかし、夏頃から、こんな生活にも充実感が薄れてきた。一昨年までは春夏秋冬、年間4回、展覧会に出品していたが、去年はCOVID-19の感染拡大に因り、展覧会の

中止が相次いだ。11月になり感染防止対策を講じて規模を縮小してやっと展覧会が開催され、一年ぶりに出品、展示された。幸い展覧会に関係した新規感染者は認められず、出品者は皆が久しぶりの再会と展覧会を楽しんだ。趣味として画を描くことは日常生活の中では必ずしも必要なものではない“不要不急”な活動の範疇に入るものであろう。自分自身は特に自己顕示欲が強いとは思わないが、1年間、展覧会に出品する機会が無い事からくる空虚感は大きく、絵を描く気力の低下を実感した。展覧会出品作を描く時はスケッチ等とは異なり、前作からの宿題を念頭に置きつつ、完成度は納得できるものか否か等、かなり緊張感を伴って描く。この適度な緊張感こそ心身の健康維持に大きな意味を持っていることが解った。どんな趣味でも同じであろうが、一人で黙々と励んでいても長続きしない事が多い。仲間らとの交流を楽しみつつ、発表の場を持つことがそれを長く続けるために必要な事のようなだ。

「人間、感動無くして人生と言えるか」、毎日を健康で充実して過ごす事ができれば、本人は幸せであり、間接的には社会に貢献している事になる。

一去年は15回展覧会を観る機会があったが、去年は2回のみであった。作家が全精神を注いで完成させた作品は見応えがある。音楽、美術等、芸術の世界に身を置く人々にとっては努力の成果を発表できる場が無くなる事は精神的に大きな痛手を被る事になると聞いている。画家は観る喜び、観せる喜び、発表の場があってこそ自分の立ち位置が確認でき、より高い画境を目指す気力を持続する事ができるという。今年こそ、心置きなく仲間と集い、飲み、美術談義ができるよう、一日でも早くCOVID-19の流行が終息してほしいものだ。 (青)